実施報告書

◆ 基礎情報

計画名	現代社会の諸課題での共立リーダーシップの改善と実践
実施責任者	ビジネス学部ビジネス学科　野沢誠治
対象者	現代社会の諸課題（経済・産業）01　履修者（2年～4年　34名）
実施期間	2025年11月～2026年1月

◆ 取組み概要

本取組は、必修科目「現代社会の諸課題」において、共立リーダーシッププログラムを活用し、学生が「共立リーダーシップ」を知識として理解するにとどまらず、実践できる力として身につけることを目的として実施したものである。

25年度の取組は、24年度に実施した同取組の成果を踏まえ、学生の学びがより深まるよう設計された。24年度の取組では、振り返りの質と量が向上したことにより、学生が自身の行動や成長を具体的に捉え、今後に向けた改善点を主体的に考える姿が多く見られた。特に、目標・行動確認シートを活用した振り返りや、プレゼンテーション、チーム、個人の三段階に分けた振り返りを行ったことで、学びを多面的に整理し言語化する力が高まった。これらの振り返りは、学生が今後の学生生活や協働活動の中で共立リーダーシップを実践していくための動機付けにもつながっている。

一方で、協働活動の時間が十分に確保できない場面もあったことから、25年度は講義（教養テーマ）部分を整理し、協働活動および共立リーダーシップ育成に関わる取組を後半に拡充した。これにより、実践と振り返りをより充実させ、学生が共立リーダーシップを自らの行動として定着させることを目指した。

◆ 取組み全体の流れ

時系列・段階など

本取組は、「現代社会の諸課題」の授業構成に沿い、段階的に共立リーダーシップの理解と実践を深める流れで実施した。25年度は、24年度の取組で得られた「振り返りが学びの深化と動機付けにつながる」という成果を踏まえ、協働活動および振り返りに十分な時間を確保する構成とした。

第2回から第5回までは、教養テーマであるシェアリングエコノミーを中心に、現代社会の諸課題に関する基礎的理解を深めた。第6回では、後半の協働活動に向けた導入として、共立リーダーシップの考え方について説明を行い、実践ガイドを用いて理解を促すとともに、個人およびチームの目標設定を行った。第7回から第11回にかけては、学部横断型のチームによる協働活動を実施し、課題解決に向けた検討と実践を行った。授業では、教員に加え、LA経験者2名を配置し、チームの状況に応じた助言や支援を行う体制を整えた。また、授業後には教員と支援学生で振り返りを行い、良かった点や改善点を共有することで、共立リーダーシップ育成に効果的な支援方法の検討につなげた。

第12回および第13回では、成果発表としてプレゼンテーションを行い、ルーブリックを用いた評価と振り返りを通じて、協働活動の成果をチームで整理した。最終回となる第14回では、当初設定した個人・チームの目標に立ち返り、自己評価シートや振り返りシートを用いて総括を行い、Kyonetでのレポート提出を通じて、学生一人ひとりが自身の学びと共立リーダーシップの実践を言語化した。

◆ 取組みの成果

実施報告書

◆ リーダーシップ教育に関する実践

共立リーダーシップの意識づけ、目標設定の活動	意識づけと目標設定のために、共立リーダーシップ実践ガイドで行動概念を可視化した上で、チームでは「方針・ルール作成シート」により、発言しやすい雰囲気や役割分担、相互支援などを議論し言語化した。個人では「行動確認シート」を用い、率先垂範や相互支援などの行動項目から実行目標を設定させた。指導面では抽象的な表現を避け“行動レベル”での記述を求めたことで、次回以降の協働活動に対する意欲や質の向上につながった。また、提出させたシートは後半の振返りに活用することを意図した。
協働活動	協働活動では、テーマに基づき調査・分析・資料作成・プレゼン準備までをチームで行った。話し合いでは全員が発言し、一人作業に偏らず、相互支援や役割分担が自然に行われた。付箋や模造紙を用いたアイデア出し、欠席者への共有、オンライン連絡等を通じ協働の実効性を高めていた。一方で進行速度にはチーム差がみられたため、教員とリーダーシップ知見を持つTA2名が状況を見ながら適宜介入し、きめ細かに支援した。特にTAの存在はチーム課題のその場解決を促す点で有用であった。全体として率先垂範・相互支援・包容性などの行動が見られ、心理的安全性と協働スキルの向上が確認された。
共立リーダーシップの観点での振り返り	振り返りでは、第6回に設定したリーダーシップ目標を踏まえ、個人・チーム単位で振り返りシートに記入し、相互コメントを行った。プレゼン、チーム、個人の各単位で分けて振り返ることで、役割分担や目標に向けた行動の重要性を具体的に捉えることができていた。また、共立リーダーシッププログラムの教材を用いたことで、成果だけでなく改善点や次に取り組むべき行動目標を言語化しやすくなり、自己の成長と課題を整理する効果が確認された。最終的にはレポート提出により振り返りの内容を文章化し、今回の学びを今後のリーダーシップ実践へ接続する機会となった。

◆ 学生の成長に関する総括

学生のリーダーシップに関する成長は、意識づけと目標設定の段階では明確に確認された。共立リーダーシッププログラムの教材を用いたことで、自身が発揮したいリーダーシップ行動を言語化し、チームとして大切にしたい行動やルールを共有できていた。一方で、協働活動の段階では設定した目標が常に意識されていたとは言い難く、チーム内の情報共有や作業遂行が優先される場面も見られた。しかし、活動が進みプレゼン準備に入る頃には、率先垂範や相互支援といった行動が自然に発揮され、心理的安全性の高まりとともにチームとしてのまとまりが生まれていた。振り返りの段階では、設定した目標に立ち返り、できた点と難しかった点を整理し、次に活かしたい行動を具体化することができていた。全体として、意識づけ→実践→振り返りの循環が成立し、行動と目標を結びつける力が育ちつつあることが確認された。

◆ 取組みを通した全体の所感

本取組を通して、リーダーシップ教育においては知識以上に「振り返りの設計」が学びの深さを左右することを実感した。特に、目標設定と行動を明示したうえで、個人・チーム・成果発表の視点から振り返りを行うことで、学生が自身の変化や課題を具体的に捉え、次の行動につなげようとする姿勢が育まれた。一方で、協働活動には十分な時間と丁寧な支援が不可欠であり、授業全体の時間配分や進行管理には工夫が求められた。ただしこれは、リーダーシップ教育が単に任せるのではなく、行動の観点を明確にしながら支援する設計を必要とすることを示す教育的示唆でもあった。リーダーシップは一部の学生に限らず、役割に応じ全員が発揮できる点に教育的な面白さと難しさがある。本取組で得られた知見は協働型授業や演習にも適用可能であり、今後は協働活動と振り返りの質をさらに高め、学生が学内外で共立リーダーシップを実践できる教育設計を継続したい。

◆ 今後の展開

本取組は、必修科目「現代社会の諸課題」に共立リーダーシップ教育を組み込む実践として一定の成果を得た。同科目は複数クラスで開講されており、本取組で得られた協働活動や振り返りの設計、教材活用の知見は、他クラスや他科目にも応用可能である。また、共立リーダーシッププログラムは行動観点と振り返りの枠組みが明確なため、演習・ゼミ科目や課外活動といった協働的学習にも接続できる可能性がある。次年度以降も成果を踏まえて授業改善を継続し、必要に応じて学内共有や連携を進めていきたい。

この報告書に加え、別途、教職員向け、学生向けのアンケートを実施させていただきます。